

## イチゴの品種特性に関する研究

### 第2報 果実の大きさとそろい

藤野 雅丈・五十嵐 勇

(野菜・茶業試験場盛岡支場)

The Varietal Characteristics in Strawberry

#### 2. Fruit size and it's uniformity

Masatake FUJINO and Isamu IGARASHI

(Morioka Branch, National Research Institute of Vegetables, Ornamental Plants and Tea)

#### 1 はじめに

イチゴの育種を行う場合、交配親の選択は特に重要であるが、その素材である品種の特性に関するデータは意外に乏しい。幸い、当支場には多くの品種(系統)が保存されているので、その特性を明らかにし、品種育成に活用しようと企てた。前報<sup>1)</sup>では果実の糖度と酸度の品種間差について報告したが、本報では果実の大きさとそろいの品種間差について検討した。

#### 2 材料及び方法

供試したのは、当支場保存品種中の150品種(系統)で、1987年8月中旬採苗、9月29日定植で露地栽培した。試験

区は1区6株の2反復で、うね幅140cmの2条植え、株間25cmとした。1988年6月8日から、週2回、完熟果を収穫し、1個ずつ重量を測定した。収穫調査は7月7日で打ち切り、その後、個体ごとの果房数を調査した。

#### 3 結果及び考察

供試150品種(系統)の株当たり収量、株当たり果数、株当たり果房数、果房当たり果数、平均果重、同変動係数の品種間平均値等を表1に示す。

株当たり収量は、最高513g、最低41gで、150品種(系統)の平均は191.6gであった。概して、外国品種の方が収量が高かったが、これは日本の品種が、促成栽培に向くよう、休眠の浅い方向へ品種改良が進んだため、東北地

表1 供試150品種(系統)の株当たり収量、平均果重等の形質の品種間平均

形 質	平均値	SD	最大値	最小値	高 い 品 種	低 い 品 種
株当たり収量(g)	191.6	81.9	513	41	Senga Gigana, Redchief, Senga Sengana, Jaspa, Badger glow 18, Shasta	Fairfax, HB-15, Marlate, Victoria, Excelsio, 紅鶴, 福羽, 促成3号
株当たり果数(個)	23.51	10.52	67.5	6.7	Senga Gigana, Catskill, Senga Sengana, Regina, Pocahontas, Profusion,	Fairfax, Marshall, HB-15, Kanner King, Radiance, Erie, 福羽, 紅宝満, 筑紫
株当たり果房数(本)	3.26	1.23	8.0	1.0	Florida 90, Profusion, Merton Princess, Regina, Senga Sengana, Catskill	Fairfax, Florida Belle, Marshall, Missionary, Red Rich, Vola, 筑紫
果房当たり果数(個)	7.27	2.05	16.2	3.5	Excelsio, Pocahontas, Missionary, Redchief, Raritan, Tahoe, 長寿	Fairfax, Merton Princess, 阿賀, 紅鶴, 紅宝満, 福羽, はるのか, 東北15号
平均果重(g)	8.53	2.57	17.0	2.2	Dybdahl, NY844, Atlas, NY 1406, Redmaster, Micmac, 盛岡21号, 筑紫	Badgerbella 17, Excelsio, Marlate, Utha Shipper, Regina, Victoria, 紅鶴
同上変動係数(%)	60.4	8.4	90	42	Siletze, Zefyr, Ar more, C. Prizewinner, Gorella, Red Rich, Deutch Evern	Cascade, Tyee, Radiance, Florida Belle, Holiday, Huxley, Jersey Belle

方の露地栽培にはあまり適応しなくなっているためと思われる。

株当たり果数は、最高67.5個、最低6.7個で、平均は23.

51個、株当たり果房数は、最高8.0本、最低1.0本で、平均は3.26本、果房当たり果数は、最高16.2個、最低3.5個で、平均は7.27個であり、それぞれ品種間差が認められた。

果実の大きさを示す平均果重は、最高17.0g、最低2.2gで、平均は8.53gであり、その変動係数は平均60.4%であった。概して、日本の品種の方が揃いが良いようにみうけられた。果実の大きな品種には‘Dybdahl’、‘New York844’、‘New York 1406’等があり、果実の小さ

な品種には‘Badgerbella 17’、‘Excelsio’、‘Marlate’等があった。

各形質の変動幅をみると、収量や果数、果房数で品種間差が大きく、平均果重やそろい、果房当たり果数の品種間差はそれほど大きくはなかった。

表2 各形質間の相関係数

	② 株当たり果数	③ 株当たり果房数	④ 果房当たり果数	⑤ 平均果重	⑥ 同変動係数
① 株当たり収量	0.765 **	0.610 **	0.414 **	0.293 **	0.138
② 株当たり果数		0.789 **	0.507 **	-0.317 **	0.335 **
③ 株当たり果房数			-0.079	-0.260 **	0.263 **
④ 果房当たり果数				-0.132	0.203 *
⑤ 平均果重					-0.332 **

表2には、各形質間の相関係数を示した。

株当たり収量は、株当たり果数、株当たり果房数、果房当たり果数、平均果重のいずれとも正の相関が高いが、果実のそろいとはあまり高い相関は認められなかった。果実の大きさは、収量と正の相関を持つが、果数や果房数とは負の相関があった。果実のそろいは果数や果房数と正の相関があるが、果実の大きさは負の相関が認められた。

イチゴの品種改良は、果実を大きくする方向で進められることが多い。このことは、商品性、省力化の面から大変重要なことと思われるが、収量や果実のそろいを向上させる効果も期待できそうである。

4 摘 要

イチゴ育種の基礎資料を得る目的で、150品種(系統)の果実の大きさとそろいを検討した。その結果、果実の大きさとそろいに品種間差が認められ、他の形質との相関関係も明らかにされた。

引用文献

1) 藤野雅丈, 高田勝也. 1987. イチゴの品種特性に関する研究. 第1報 果実の糖度と酸度. 園芸学会昭和62年度秋季大会発表要旨. p 420-421.